

いかにして否定精神が肯定精神になり得るか

——ニーチェにおけるニヒリズム克服の問題——

西川 友和

ニーチェにおけるニヒリズム克服の問題に関する混乱状況の打開は問題の原因究明から着手しなければならない。そのため、次の行程が辿られる。一、問題の原因究明。二、問題解決の手段としての概念装置の提起。三、装置とテキストとの照合。四、両者の相違を説明する仮説の提起。五、仮説に基づくテキストの読込みと仮説の正当性の証明。以上の行程によって、ニヒリズム克服の問題の在りかが見えてくるであろう。

一、混乱の原因。ニヒリズム克服の問題が混乱している原因は、当のニヒリズム概念及びその適用上の混乱にある。それゆえ、これらを確定することが必要である。

二、問題解決のための概念装置。ニヒリズム概念の混乱を正すため、「ニヒリズム」及び「ニヒリズム」の二つの表記を用い、各々に以下の意味内容を担わせる。すなわち、「ニヒリズム」とは、神の存在の有無に係わりなく、自己と世界にはいかなる意味も無いということであり、この意味での「ニヒリズム」にとつて「神の死」は、既定の事柄に属する。一方「ニヒリズム」とは、自己と世界には何らかの意味・目標が存在する、とするものである。神の存在の有無に係わらないが、神の存在を常に予想させる概念である。以上の規定に従えば、「神の死」の帰結としてニヒリズムが到来し、それ故、自己と世界のすべてが無意味になった、

と通常語られるニヒリズムは、それ自体として見れば「ニヒリズム」だが、神の存在を予想させるため、「ニヒリズム」の意味内容を含むことになる。無論、克服されるべき本来のニヒリズムは「ニヒリズム」の側である。

さらに、ニヒリズム概念の適用上の混乱を正すため、次の「原則」を導入する。1、「ニヒリズム」は克服すべきだが、それは自己の「ニヒリズム」に限られ、他者の「ニヒリズム」を克服しようとすることは、自己の「ニヒリズム」の現れであり、自己の「ニヒリズム」を深化させる。2、自己と世界の「ニヒリズム」は克服すべきものではなく、それを行うことは、自己の「ニヒリズム」の現れであり、これを深化させる。したがって、ニヒリズム克服の対象は、自己の「ニヒリズム」に限定される。

三、装置の根拠。概念規定と原則がニーチェのテキストに副うか否かが確認される。

①「何のために？」というニヒリズムの問いは、これまでの習慣に由来し、この習慣によって目標は、外部から、つまり何かある超人間的な権威を介して、立てられ、与えられ、要求されると思われた。この権威を信じるのが忘れられた後も、古い習慣に従って、無条件に語ることをころえ、目標や課題を命令することができる他の権威が探し求められる。

(「権力への意志」二〇番)

②ラ・デイ・カル・ニヒリズムとは、承認されている最高の諸価値が問題であるとき、生存を絶対に維持できないという確信である。(中略)この洞察は、育て上げられた「誠実性」の帰結であり、したがって、それ自身道徳への信仰の帰結である。

(「権力への意志」二番)

③ニヒリズムの極限的形式は、何れの信仰も、何れも真なりと思ふことも、必然的に偽であるという洞察であろう。なぜなら、眞の世界は全く存在しないからである。したがって、それは遠近法的仮象であり、その起源は私たちのうちにある（私たちがより狭い、限られた、単純化された世界を絶えず必要とする限り）。

——私たちが、没落することなしにその仮象性を、嘘の必然性をどれほど承認し得るかは、力の程度にかかっているということ。その限りニヒリズムは、眞実の世界の、存在の否認として、神的思想方法であるかもしれない。

〔権力への意志〕 一五番

「何のために？」という①の問いと我々の（ニヒリズム）概念は一致する。また、③においては自己と世界の無意味性が端的に承認されており、これと我々の「ニヒリズム」が対応していることは、容易く理解できる。しかし、②の「ラディカル・ニヒリズム」（以下、これを「②」と表記。「①③」も同様）に関しては、それが「ニヒリズム」と（ニヒリズム）の両要素を併せ持っているため注意を要する。ニーチェによれば「②」と親近性を持つのは、「③」である。たしかに、「②」は、それ自体としては我々の「ニヒリズム」であり、またその限りにおいてのみ「③」と親近性を持つ。しかし、③が（ニヒリズム）を「仮象」として承認するのみならず、「ニヒリズム」を「神的思想方法」としてただそれ自体で肯定するのに対し、「②」は、ニーチェによれば、〈①〉と対立関係にあり（原則1に抵触）、自らを克服すべきものと捉える（原則2に抵触）故、我々の理解によれば（ニヒリズム）へ変質する可能性を内在させている。それゆえ、ニーチェに

反して我々は、「②」は〈①〉と親近性を持つ、と言わなければならぬ。

四、しかし、ニーチェに反して、とは奇妙なことではないだろうか。これを説明するため、以下の仮説を提起する。

ニーチェは、〈①〉「③」を明確に区別しているが、「②」が（ニヒリズム）に変質することを見落とし、「②」と「③」の親近性を主張する。これは、彼が「前提」に無自覚であることを示しており、ニーチェを、彼自身の（ニヒリズム）へ導く。ただし、ニーチェは「③」を予感し得ているため、自己の（ニヒリズム）的構想からの転換が可能である。

仮説に拠れば、「いかにして否定精神が肯定精神になり得るか」に対しては、次のように応えられよう。ニーチェのニヒリズム克服は、彼が自身肯定精神になつた地点から始まる。つまり、否定精神から肯定精神への道程全体が彼の（ニヒリズム）の現れなのであり、克服の問題はこの「全体」からの転換として捉えなければならない。

五、装置及び仮説の是非。仮説の成立条件たる原則の是非は次のように考えられよう。ニーチェが原則に無自覚であるからこそ彼の（ニヒリズム）が成立するのであつて、そこからの転換である彼の（ニヒリズム）克服は、原則の無自覚なくしてはあり得ない。もし彼が当初から自己の（ニヒリズム）を問題としてしているなら、他者の〈①〉、及び「②」を克服しようとはしていないはずである。

以上、我々は、ニーチェのキリスト教批判を彼自身の（ニヒリズム）の現れとして捉えた。しかしこの「現れ」は、彼のキリスト教批判が砂上の楼閣であることを意味しない。彼の批判がキリスト教的であるとしてもその批判の射程は別に論ずべき問題である。